

賀屋恭安 医案③

歳は庚午二月の日、鞍馬の松本某が妻、疾 頗る
危急、療を晩成堂に請う。予 轎を促して往く。半
産の後脱血し、目閉じて鼻扇し、語言出でず、手足
動かず、一身微冷にして、状 死人の如し。是の如
きこと、既に一日夜、医 僉以て虚と為す。予 其
の胸腹を按ずるに、微満微熱有ることを覚え、一塊
心下に迫塞す。是に於いて桃仁承氣湯を作り、一盞
許を灌ぎ入る。黎明に稀粥を嚙り、昼間、諸証 稍
く穏やかなり。便 利すること二三行、再び之を診
れば、塊 軟らかくして腹に在り。乃ち当帰芍薬湯
を進む。是の夜、予 晩成堂に帰る。続けて前方を
与う。数日にして痊ゆ。